

学校教育課だより

かけはし

花は無心に蝶を招く

一年間、温かな御指導をありがとうございました

教育長 勝又 将雄

◆ 現在、御殿場市教育委員会は、「社会総がかり」の取組を標榜して、大きな取組をいくつも同時進行しています。

特に今年度は、御殿場市のこれからの教育を十年展望する「御殿場市教育振興基本計画」やすでに策定されている子ども条例の具体の方向性を提示する「子ども条例行動計画」、そして、「読書原しずおか」の御殿場型「子ども読書活動推進計画」等々を策定しています。この三月市議会で

も一般質問に登場した各事業です。「社会総がかり」の位置づけを認識してほしいと願います。

◆ 例えば、女優の吉永小百合さんの原爆詩集の朗読はあまりに有名ですが、一方で、修学旅行先で実際起きている原爆被災地の「語り部」に対する生徒の暴言など、単なる自然の流れの中では「伝えるべきこと」を伝えることが難しくなっている昨今です。改

学校教育課だより
「かけはし」
【第 11 号】
平成 29 年
3 月 13 日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

めて「教育」のありようを思っています。学校教育だけでなく、家庭の教育、地域の教育の変遷と現状をどのように受け止めているでしょうか。「校風」、「家風」、「気風」の流れる風を思っています。

御承知のように現在、国の主導で大きな「教育改革」の波が押し寄せています。法の改正だけでなく、「子育て」の指針となるような内容まで左右されそうな雰囲気も一部に指摘されています。先人の切り拓いた北駿の教育の姿、それを担う教職員のありようも改めて強く意識します。そうした厳しい時代の教育のかじ取りにまい進された教職員のみなさんがいて、御殿場市の教育の誇りある、信頼される高い教育が保たれています。

◆ 平成二十八年度末となり、各幼稚園学校において卒園式卒業式が執り行われます。こうした時期ゆえに、「子どもたち中心」の教育活動集大成としての卒園式、卒業式を思いますが、それを企画、支援する教育者集団の成長も意識します。「チーム学校」の一つの姿だろうと思います。一人一人の子どもたちの心に刻まれる、新年度に繋がる素敵な学級担任の「学級じまい」があることを願っています。

◆ さて、唐突ですが、みなさんは、教育者として（学校経営関係者として）どんな「心の拠りどころ」を持たれているのでしょうか。振り返って、この平成二十八年度も本市の教育界にとつては激動の年でした。つらい話ですが、現職の女性教師がお二人も病気で亡くなられました。学校、児童生徒、同僚だけでなく、何より御家庭の御家族の皆様にとつてあまりに切なく哀しい出来事でした。御冥福をお祈りするばかりです。

そして、さらに根絶のできない教職員の不祥事。ここ数

年発生し続けている県内各地各校種の不祥事に対して学校信頼回復にどれだけの時間が費やされたでしょうか。「たった一人の、たった一度の許されない出来心」が、当該校だけでなく、児童生徒、学校、保護者、地域社会に対して計り知れない影響を及ぼしました。各学校においては、この現実を厳粛に受け止め、信頼回復に誠心誠意努力されているものと信じています。

今回も「不祥事処分」の県教育委員会記者会見と謝罪。その県教育委員会から市教育委員会、本人、校長への処分伝達。市内では臨時校長会を開催し、同時に当該校では臨時保護者会の開催。その影響は計り知れません。何より北駿の教育は実にまじめで、誠実さがその根底にあることを誇りとしていました。先人が築き現在に引き継ぐ「誇りある北駿の教育」に、まさに泥を塗る不祥事でした。御殿場市教育委員会も教職員の職務監督者として、県教委同様の《謝罪》と信用回復へのいばらの道を、歯をくいしばって前に進むことを発信するしかありませんでした。

◆冒頭（花は無心に蝶を招く）の言葉は「良寛」の言葉です。教師としての「心の拠りどころ」を考へるとき、ふと、良寛さんのこの言葉を思いました。

一年間、温かな御指導をありがとうございました。卒業進級の子どもたち同様に、職員にも人事異動があります。それぞれの置かれた立場で、新しい年度への夢と希望をもつて、春の短くも充実の準備期間を楽しみたいと思います。四月から「新三学期制」の実施となります。これまで味わったことのないようなわくわくする「平成二十九年」の新しい教育を展開しようではありませんか。子どもたちの笑顔がすぐそこに見えます。

「不易」と「流行」

教育監兼学校教育課長兼教育指導センター所長

鳥越 雅幸

所用で午後、車で学校へ向かう途中、横断歩道で右手をびんと挙げている小学生がいたので、停止したところ、渡り終わった小学生から、元氣よく「ありがとう、ございました！」という言葉が返ってきました。学校でいいことがあったのか、早く帰って友達と遊びたいのか分かりませんが、ここにこしながら家路を急ぐ姿がなんとも微笑ましく映り、子どもが学校から帰る時の姿は、こうありたいなと思う場面でした。

さて、「不易」「流行」という言葉があります。教育における「流行」は、およそ十年ごとに改訂される学習指導要領に反映されます。その変遷を振り返って見ると、昭和三十三年～三十五年の改訂では、学習指導要領の教育課程の基準としての性格が明確化され、道徳の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上、

平成十五年には、学習指導要領のねらいの一層の実現の観点から学習指導要領の一部改正が行なわれました。平成二十年～二十一年（現学習指導要領）の改訂では、「生きる力」の育成、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを図り、授業時数の増加、指導内容の充実、小学校外国語活動の導入が提示されました。

そして平成三十二年度から実施される学習指導要領では、「生きる力を育むために①知識や技能、②思考力、判断力、表現力、③学びに向かう力、人間性の三つの育てるべき資質・能力が示されました。また、その実現のために授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」が示され、特別な教科「道徳」、小学校への英語科の導入等が提示されています。

このように時代によって教育内容の質、量、指導方法は変わってきました。

一方、教育における不易はというと、私たちが行なっている教育は、公教育であるということ、そしてその要は授

業であるということだと思えます。

さらに不易、変えてはいけないこととして「こころこころ」「謙虚」「誠実」という言葉に代表される先輩から引き継がれてきた北駿の教育があります。時代が変わっても、学習指導要領が変わっても、子どもたちに誠実であり続ける北駿の教育を伝承していかねければならないという思いを強くしています。

国立教育政策研究所

「魅力ある学校づくり」

調査研究事業に取り組みます

この事業は、不登校やいじめを未然に防止し、不登校等対応の最終的な目標である児童生徒の社会的な自立を促すため、豊かな人間関係づくり、学習指導の充実、児童会・生徒会活動の充実など、児童生徒にとって魅力ある学校づくりを推進するというものです。平成二十九年度は、西中学校区の三つの小中学校と校区内の各園をモデル校区として取り組み、平成三十年度は、その成果を市内全体に広めていく予定です。

